

Historical and Environmental Colors around Shenyang, China

MITSUBOSHI Muneo

Key words: color, Shenyang, Eight flags, Qing Dynasty, Wunvshan, Goguryeo

Abstract

The author visited Shenyang, China, from February 27 to March 1, 2012 to collect data concerning “Eight flags”, which were used in Qing Dynasty as the social and military organizations of the people. Eight flags were of different colors and designs.

Although enough data were not obtained on them, some pictures were taken in the museums there. Their detailed analysis have to be done in the future.

The author also collected data by camera for colors in the environment in Shenyang and around there including Wunvshan, where Tongmyong-Wang, Zhumeng, is said to found Goguryeo in B.C.37.

中国・瀋陽周辺の歴史的色彩と環境色彩

三 星 宗 雄¹⁾

キーワード：色、色彩、瀋陽、清、八旗、ヌルハチ、ホントイジ、高句麗、五女山

はじめに

色の使われ方という点で、長い間関心を持っていたことがある。それは中国・清の時代（正式には前身の後金の時代から）に、その社会組織兼軍事組織として八旗制と呼ばれる組織制度が採用され、その区別に色およびデザインが用いられていた点である（加藤、2005）。その手がかかりを求めて、太祖ヌルハチ（努爾哈赤）が清の前身である後金を建国し、後に都に定めた瀋陽に出かけた。諸事情から3泊4日（2012年2月27日～3月1日）という短い期間になり、したがって将来の本格的な調査の前の予備調査の役割となった。

同行した共同研究者の長宗雄教授のその専門分野における中国の共同研究者李春吉教授（瀋陽・東北大学）に案内をお願いした。案内された主な場所はヌルハチ（努爾哈赤）が1616年後金を建国し、瀋陽に遷都

1) 今回の調査は直接的には同行した共同研究者長教授の中国におけるその分野の共同研究者である東北大学李教授訪問という形で行われた。当地に滞在した4日間ずっと案内して下さった李教授および大学院生にこの紙面を借りて心から感謝する。

する前、親戚や兵士とともに住んでいたホトアラ（赫図阿拉）城（遼寧省撫順市新賓県）、および1636年国号を後金から清へ変えた第2代清皇帝太宗ホンタイジ（皇太極）と孝端文皇后（ボルチキット博爾濟吉特氏）の陵である昭陵（北陵、1651年完成）であった²⁾。

また瀋陽はかつての満州国との関係では中心的役割を果たした都市でもある（島田、1965; 杉山望、1995; 太平洋戦争研究会、2005; 入江、2006）。さらに歴史を遡れば紀元前37年に高句麗が建国された五女山に近い。高句麗の始祖東明王（チュモン朱蒙 同一人物かどうかについては異論がある）は扶余族出身とされているが（金、1989）、一時宮廷闘争に敗れた後、現在の遼寧省と吉林省を流れる、かつて卒本川と呼ばれた、現在の渾江辺りに逃れたとされる。現在でも吉林省に扶余という地名がある（川村、2002）。また建国された場所は五女山とされるが、これもまた現在の遼寧省桓仁満州族自治県にある。

結果的に出発前に抱いていた淡い期待は満たされなかったが、次回、次々回の本格的な調査のためにぜひ記録としてとどめておきたいと思う。残念ながら本誌は黑白印刷なのでカラー写真の迫力は伝えることができないが、オリジナルな画像そのものは手元に残るので、将来何らかの形でまとめる時に役立つと期待している。

筆者には歴史認識が乏しく、場合によっては非常に微妙な認識、例えば満州国あるいは高句麗の帰属の問題、などについて誤った認識を持っている恐れがある。その場合には筆者の浅学に免じて、ご容赦を願うばかりである。

今の段階では分析の視点が定まっていないため、時間軸に沿って記していくことにしたい。

2) 現地では見ることに忙しく、メモなどはまったくとっていなかった。今2年前の記憶と手元の写真とを頼りに筆を起しているの、訪問先について誤解があるかも知れない。その場合には筆者の勉強不足に免じてご容赦をお願いする。またぜひご指摘をお願いしたい。

1. 仁川空港（韓国）にて

これについては別な機会にも触れたが（三星、2010）、男性用の緑色のトイレマークは非常にめずらしい（図 1.1）。空港内の表示も青色を背景に黄色、白、明るい黄緑色で統一され（図 1.2）、上のトイレマークとも歩調を合わせている。



図 1.1 トイレマーク（仁川空港）



図 1.2 サイン表示（同）

2. 瀋陽市内で

成田—仁川（韓国）—香港—瀋陽と乗り継いで2月27日夜到着した。当日は相当寒かった記憶があるが、空港の入国審査に向かう途中ランニングシャツの男性を複数見た。前年北京を訪れた際、有名なデパートの宝石売り場で、やはりランニングシャツの男性が宝石を真剣に見ていたことを思い出した。またかなり前にあるが、筆者のゼミに中国東北部からの留学生がいた。彼は夏の合宿で長野に行った時、突然パンツ1つになって目の前を流れる谷川で泳ぎ始めたのである。女子学生もいる前である。大陸の人にはこういう外見にまったくとらわれない気風がある。

筆者には到底真似のできないことなのでなおさら羨望の的である。

しかしその留学生、食事の時にある日本人のゼミ生が勝手に好きなものをかき集め、食べ始めた際、「**君、順番をきちんと守らなければダメだよ。先生がまずとって、我々はそれからだ」とクギを刺した。卒業後何年かメールのやり取りがあったが、今はない。今ごろどこでどうしているだろうか。

図 2.1 は瀋陽市内で見たケンタッキー、図 2.2 は例によってマクドナルドの看板である。ケンタッキーはともかく、マクドナルドの看板では原色の赤に配慮がなされている。良く知られているように、中国の人にとって赤は特別な色である。その赤色が縮減される事態についてどのよ



図 2.1 ケンタッキー店（瀋陽市内）



図 2.2 マクドナルド店（同）



図 2.3 吉野家（同）



図 2.4 電気店（同）

うに感じているか、一度聞いてみたいものである。

しかしやはり赤色は健在である（図 2.3、2.4）。ちなみにこの吉野家はホテルのすぐ目の前にあったが、入る機会はなかった。

3. 五女山

瀋陽から車で数時間のところにある。世界遺産「高句麗遺跡群、2006年指定」の一角をなす。ここへは筆者のたつての願いで連れてきていただいた。時期的に麓の店は閉店しており、資料を集めることはできなかった。時折車が往復する程度で人気はほとんどなかった。筆者は頂上まで登ることを主張したが、同行した長教授が体力に不安を感じ、取りやめになった。

自然の植生は日本とほとんど変わらない（図 3.1、3.2）。特に松、その種類までは分からなかったが、は日本の風景を思い起こさせた。図 3.7 は五女山頂上への途中から見た桓仁の街である。2 千年前、ここにあのような高い文化を持った国が建設され、やがてその影響が日本にも及んできたと思うと驚くばかりである（共同通信社・日本新聞博物館、2012）。



図 3.1 自然景観 (1)



図 3.2 自然景観 (2)



图 3.3 五女山案内



图 3.4 五女山 (1)



图 3.5 五女山 (2)

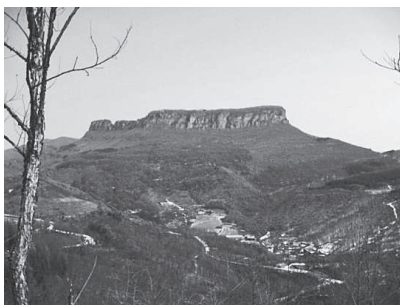


图 3.6 五女山 (3)



图 3.7 五女山途中から見た桓仁の街

4. 桓仁の街

さすがに桓仁市内に2千年前の高句麗建設時の記憶を探すことは難しい。また探すための準備もしていない。

市内の商店は鮮やかな看板で彩られているが(図4.4~4.6)、それら鮮やかな色彩の看板はすべて建物の1階のみであり、2階以上にはない。近景としての1階の色彩は住人の好みを取り入れ、遠景としての3階以上は一定の色彩で統一するというのは最近の街の色彩調和の手法である。街を遠景として眺めると、実際にそのような効果が感じられる(図4.2、



図 4.1 桓仁城門



図 4.2 同



図 4.3 同



図 4.4 桓仁市内の商店



図 4.5 同



図 4.6 同



図 4.7 簡便トイレ

4.3)。

また図 4.2 および 4.3 を子細に見ると、架空電線がまったくなく、非常にすっきりした景観となっている。これはもちろん偶然ではない。架空電線の地下埋設は現在わが国では取組みが始まったばかりである（三星、2014）。図 4.7 は筆者のもう 1 つの研究テーマである公衆トイレの海外におけるデータである。

5. ホトアラ（赫図阿拉）城（遼寧省撫順市新賓県）

ホトアラ（赫図阿拉）城は瀋陽の東 60 キロの撫順市新賓県に位置し、ヌルハチの祖先を祀る永陵に近い。1603 年ヌルハチは古い城である費阿拉からここに移転し、国号を金と定めて（後金）、国の都をここに定めた。すなわち清朝発祥の地である。ここにはヌルハチとその家族、親戚が兵士および一般市民とともに住んでいた。その後 1634 年に興京と改称され、さらに清が 1644 年北京に遷都する前に、東京（遼陽）、盛京



図 5.1 ホトアラ（赫図阿拉）城蹟



図 5.2 ヌルハチ像



図 5.3 同

(瀋陽)と都が移された。これらは清朝が北京に遷都する以前の関外三都と呼ばれている。

図 5.4a～5.4t は城内のある建物（今残念ながら特定できない）の外観とその内部に描かれていた絵である。これらの絵は清朝時代の庶民の生活と逸話および皇帝を中心とする宮廷内部の様子を描いたものと思われるが、最近描かれたものとは思われないので（その理由がない）すべて記録として残しておくことにする。これらの画像は現地に赴かなければ得られないものである。

その色彩の美しさには驚かされる。特に衣服の青色については目が覚めるようである。また緑色も素晴らしい。もちろん皇帝（と思しき人）



図 5.4a 城内建物と内部の絵



図 5.4b 同



図 5.4c 同



図 5.4d 同



図 5.4e 同



図 5.4f 同



図 5.4g 同



図 5.4h 同



図 5.4i 同



図 5.4j 同



图 5.4k 同



图 5.4l 同



图 5.4m 同



图 5.4n 同



图 5.4o 同



图 5.4p 同



図 5.4q 同



図 5.4r 同



図 5.4s 同



図 5.4t 同



図 5.5 帰途上で見た商店の看板



図 5.6 同



図 5.7 同



図 5.8 同

の衣服の色は黄色（金色）である。一般庶民で黄（金）色を身につけている人は一人もいない（図 5.4f、5.4g）。黄（金）と青のコントラストが見事に人間関係を示している（図 5.4o、5.4q）。建物自体の色彩もまた極彩色である（図 5.4a、5.4b、5.4c、5.4d）。

図 5.5～5.8 は瀋陽への帰途上で見た街の風景である。繰り返すが、鮮やかな色の看板は建物の 1 階に限定され、2 階以上には見られない。また架空電線もない。

6. 昭陵（北陵）

上記したように第 2 代清朝皇帝太宗ホンタイジ（皇太極）と 孝端文皇后（ボルチキッ ト博爾濟吉特氏）の陵墓である。広大な北陵公園に隣接している。入口からまっすぐに松の林が続き（図 6.5、6.6）、約 1.5 キロ先に皇帝と皇后の墳墓である宝城がある。

この松林（2 千本あるという）は独特の雰囲気醸し出しており、その景観は筆者に非常な親近感を感じさせた。以前中国・厦門（福建省）を訪れた時、松や桜が簡単には見い出せなかったため（その後福建省からの留学生に、桜の木はあるとの指摘を受けた。周、2014）、何か日本



図 6.1 ホンタイジ（皇太極）像



図 6.2 昭陵（東陵）蹟



図 6.3 公園入口



図 6.4 巨大なシーサー



図 6.5 参道 松の木が親近感を湧きたてる



図 6.6 同 長さ 1.5 キロある



図 6.7 まざまな動物の出迎え



図 6.8 正紅門



図 6.9 同



図 6.10 同（一部拡大図 国旗にも描かれている龍の文様）



図 6.11 隆恩門

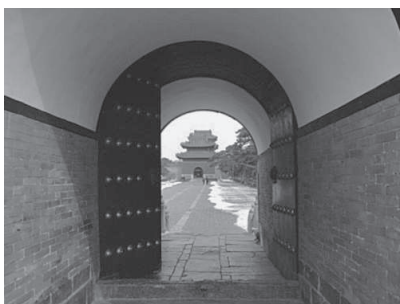


図 6.12 同



図 6.13 中部の碑亭



図 6.14 同



図 6.15 場内建物群



図 6.16 同



図 6.17 樓閣



図 6.18 同



図 6.19



図 6.20



図 6.21 トイレの表示



図 6.22 トイレ



図 6.23



図 6.24 皇帝寝室



図 6.25 涅槃図



図 6.26 同

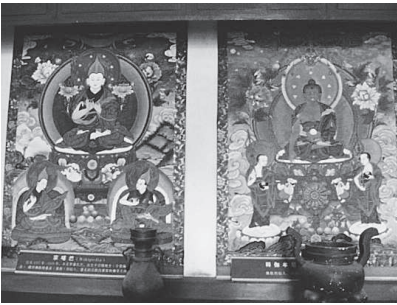


図 6.27 同



図 6.28 同



図 6.29 同

とはやや異なった印象を受けたが、一方ガジュマルの木が沖縄との共通性を感じさせた（三星、2010）。その地域の植栽は予想以上に印象の形成に大きな影響を与えるようである。

ただその両側にさまざまな動物が置かれている風景はなじみが薄い（図 6.7）。やはりシーサーにつながる思想の表れであろうか。

場内の建物群では何と言ってもその金色の屋根であろう。その色は直ちに北京の故宫（紫禁城）を思い起こさせた。3 層、4 層の建築構造は興味深い（図 6.11）。北京故宫には見られない（春名、2008）。またアーチ型の門も異国情緒的である（図 6.8～6.14）。これらの建築様式の分析については、色彩を含めて、他の機会に譲ることにしたい。

この報告に残しておきたいのは図 6.25～6.29 までの仏教の涅槃図である。非常にカラフルで、特に緑色とオレンジ色が目につく。これらの図が何を意味しているのかは残念ながら今明らかにできないが、中央に鎮座する人物（釈迦だろうか）の顔の色が白、ピンク、オレンジ、茶色、青色と多岐にわたっているのが分かる。これはおそらく清朝の国土内の多様な民族を代表しているものと思われるが、それは清朝の世界帝国としての意識を表すものである。ところで青色の顔色の釈迦と弟子（図 6.25）はどの民族に相当するものであろうか。

7. 八旗

上述したように後金および清王朝においては、社会組織および軍事組織として八旗という制度が取られていた（加藤、2005）。八旗はヌルハチが、当時女真と呼ばれていた民族を統一する過程で、女真固有の社会組織を戦時の軍事集団として編成、掌握したことに始まる。女真族は当時「ニル」（「矢」の意）という 10 人程度の集団に分かれて、四方から

獲物を追い込むという狩猟方法をとっていた。八旗制による基本的な編成形体は、有事の際に兵士となる成年男子 300 人を 1 ニルとし、5 ニルをジャラン（1500 人）とし、5 ジャランをグサ（25 ニル、7500 人）とした。各グサは、それぞれ固有の旗を持って識別されたので、グサのことを漢語で「旗」と呼ばれるようになった。八旗に属する旗人たちは、平時は農耕・狩猟に従事しつつ要地の警備や兵役にあたった。

1601 年に、黄、白、紅、藍の四旗を制定した（正旗と呼ばれる）。それら四色は五行相勝の思想に基き、黄は土徳、白は金徳、紅は火徳、藍は水徳を表しているとされる。1615 年にはそれらに縁取りをした鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍の四旗を増設し（鑲旗と呼ばれる）、合計八旗としたのである。皇帝自身は正黄旗・鑲黄旗・正白旗三旗の王で、八旗による社会組織は、皇帝の領する三旗（上三旗）と諸王の領するその他の五旗（下五旗）に分けられ、当初は平等であったものが、次第に上下関係が生じてきた（加藤、2005）。

ちなみに西太后の生家は下の鑲藍旗（下五旗）である（加藤、2005）。

以下に八旗について紹介する。

(1) 正黄旗

黄色地に青龍。粹なし。

(2) 正紅旗

赤地に白龍。粹なし。

(3) 正白旗

白地に青龍。粹なし。

(4) 正藍旗

藍地に白龍。粹なし。

(5) 鑲黄旗

黄色地に青龍。赤粹あり。

(6) 鑲紅旗

赤地に白龍。白杵あり。

(7) 鑲白旗

白地に青龍。赤杵あり。

(8) 鑲藍旗

藍地に白龍。赤杵あり。

以上のような区別に照らし合わせると、図 7.1 は正藍旗、図 7.2 は鑲紅旗ということになるだろうか。図 7.1 と 7.2 には旗以外に、戦闘服（と思われる）が示されている。それらを見つと、縁取りがあるもの（図 7.1～7.5）とないもの（図 7.6～7.9）とがある。これらの戦闘服と八旗との間には何らかの関連性があると思われるが、今は明らかにできない。今後の調査を待つことにしよう。

図 7.12～7.14 は宮廷の内部である。いたるところに黄色が用いられている。



図 7.1 正藍旗

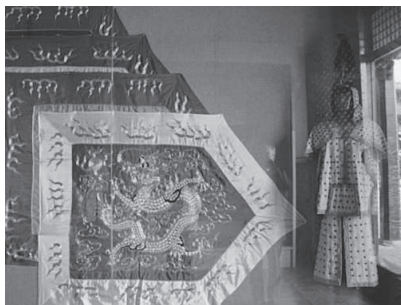


図 7.2 鑲紅旗



図 7.3 戦闘服（縁取りあり）



図 7.4 同



図 7.5 同



図 7.6 戦闘服（縁取りなし）



图 7.7 同



图 7.8 同



图 7.9 同



图 7.10 八旗の説明



图 7.11 同



图 7.12 宮廷内部



图 7.13 同



图 7.14 同

8. 赤と緑の競演

図 8.1～8.5 は瀋陽市内の歴史景観地区およびその周辺で見た風景である。消防車庫の赤色はあり得ることとして（図 8.1）、一方勢ぞろいした真赤な BM にはさすがに目を見張った（念のため記すが、これらは消防車ではないのである）（図 8.2）。昼食をとったレストランの赤色も日本では見られない（図 8.3）。図 8.4 は商業用の垂れ幕であるが、これも我々の感覚とは少し違うように思われる。中国の人たちにとって赤色が占める位置が良く分かる。色を考える場合は、共通な部分（グローバリ



図 8.1 消防車庫



図 8.2 これは消防車ではない。



図 8.3 レストランのテーブル



図 8.4 街中の風景



図 8.5 この垂れ幕を見よ。



図 8.6 張学良像



図 8.7 旧張学良書斎



图 8.8 旧張学良邸



图 8.9 同



图 8.10 同

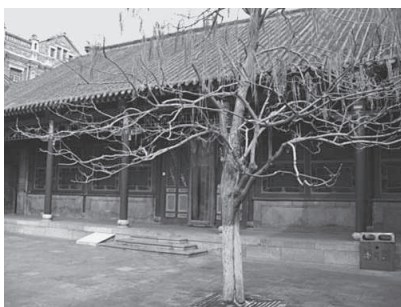


图 8.11 同



图 8.12 邸内の案内板



图 8.13 同



図 8.14 かなり目立つ公衆電話

ゼーション）と特殊な部分（ローカリゼーション）とをうまく調整する必要性を強く感じるのである（三星、2014）。

図 8.6～8.13 は旧張学良邸内の建物および案内板である。室内（図 8.7）だけでなく、外観にも緑色が目立つ。彼の個人的な趣味とも思われるが、どこから来ているのかは分からない。

9. 東北大学

最後に今回大変お世話になった李教授が所属する東北大学を紹介しよ



図 9.1 大学門



図 9.2 構内

う。例によって広大なキャンパスである。2月下旬の厳冬期であり、トイレを探すのに一苦労したことを記しておく。

10. 結びに代えて

瀋陽が含まれる中国東北三省（黒竜江、吉林、遼寧）は有史以来幾多の国が建てられては消え、生成・消滅を繰り返してきた。わが国も一時期関わり合いを持ち、閃光のように光っては消えた。

それらの足跡は関わりのあったすべての国の建築物や文化、芸術などにおいて刻まれているに違いない。色彩についても同じであろう。色彩を媒介として、色彩の外観だけでなく、その意味も含めて、各文化の交流をたどることができるのではないだろうか。文化が伝わる際に、色彩はどのような役割を果たしたのであろうか。文化によって伝わりやすい色彩、伝わりにくい色彩ようなことはあるのだろうか。

今そのようなことを漠然と考えながら、国内外のさまざまな場所で色彩のデータを集めている。色彩は移ろいやすく、かつ個人的なところがあるが、各文化の色彩に全く関連性がないとは考えられない。その微妙な、非常に微妙な関連性を探しながら分析を進めていきたいものだと思う。

引用文献／参考文献

春名 徹（2008）『北京 都市の記憶』，岩波新書。

入江曜子（2006）『溥儀 清朝最後の皇帝』，岩波新書。

加藤 徹（2005）『西太后』，中公新書。

川村 湊（2002）『満州鉄道 まぼろし旅行』，文春文庫。

共同通信社・日本新聞博物館（2012）『高句麗壁画古墳報道写真展』，日本新聞博物館。

- 金 両基 (1989) 『物語 韓国史』, 中公新書.
- 桑島節郎 (1979) 『満州武装移民』, 教育社歴史新書.
- 三星宗雄 (2009) 中国福建沿岸部の色彩と景観, 神奈川大学人文研究 169, 1-23.
- 三星宗雄 (2010) 韓国色彩事情, 神奈川大学人文研究 171, 1-22.
- 三星宗雄 (2014) 『色彩の快: その心理と倫理』, 御茶の水書房.
- 中野美代子 (2007) 『乾隆帝 その政治の図像学』, 文藝春秋.
- 汪高鑫・程仁桃／山田侑平訳 (2009) 『中国, 朝鮮, 日本 東アジア古代三国史』, 共同通信社.
- 島田俊彦 (1965) 『関東軍』, 中公新書.
- 周 曉強 (2014) 私信.
- 瀋陽旅游撲克 (旅行トランプ) 1, 2, 3, 4.
- 杉田 望 (1995) 『満鉄中央試験所』, 徳間文庫.
- 太平洋戦争研究会編・著 (2005) 『満州帝国』, 河出文庫.